真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業学術研究助成
研究成果報告書

研究事業名：【東国における親鸞とその家族・鎌倉文化の研究：立教開宗 800 年の真宗史】
研究機関：東国真宗研究所
代表者氏名：今井雅晴

■研究概要

本研究は、真宗・立教開宗の地である東国に特化したものである。鎌倉時代の元仁元年（1224 年）、親鸞がその主著である『顕浄土真実教行証文類』を執筆したことを起点として、東国での布教活動が「真宗のはじまり」とされる。

この 800 年にわたる真宗史を具体的に理解するためには、親鸞とその家族、また各時代の人々の生活環境を詳細に把握することが不可欠である。本研究は、真宗学、歴史学、美術史学、民俗学、文学など、様々な側面からアプローチを試みた。研究グループによって収集された史料を解釈し、親鸞の思想と活動の意義を明らかにし、800 年とこれからの真宗史を再検討することを目指すものである。

なお、各研究員による意見交換や所長・事務局長による進捗確認のため、以下の内容で隔月に「立教開宗 800 年研究部会・研究発表会」をオンラインで開催した。

2021 年
9 月 6 日　今井雅晴「立教開宗 800 年について」
11 月 6 日　南條了瑛「真宗伝道学について」

2022 年
1 月 17 日　小山聡子「語られた親鸞の結婚」
3 月 26 日　植野英夫「上総国に伝わる親鸞聖人像について－鹿野山神野寺の事例」
5 月 23 日　橋本順正「天台僧侶・専修念仏教団としての親鸞」
7 月 9 日　御手洗隆明「『皇太子聖徳奉讃』十一首をめぐって」
9 月 30 日　山田雄司「忍術書『正忍記』に見る仏教の影響」
11 月 26 日　高山秀嗣「『教行信証』と東国」

2023 年
1 月 23 日　楠正亮「荒木門徒について」
3 月 19 日　飛田英世「南奥・常陸の如信」
5 月 12 日　荒濱慶多（研究生）「得度体験記　一般家庭から歩む僧侶という生き方」
7 月 22 日　今井雅晴「東国の親鸞と神祇信仰」
9 月 22 日　黒田義道「本願寺覚如の再検討――その活動の意義」
11 月 25 日　ブライアン・ルパート「顕智の聖教撰述と継承　―親鸞との関係、高田門徒のネットワークと教化を通して―」

2024 年
2 月 19 日　田中祐輔「仏教文化と国際交流―日本語教育の視点から―」

以上の発表内容をもとに、自照社より論集を刊行した。

■発表媒体：単行本『東国にいる親鸞　～800 年目の浄土真宗文化～』（自照社/2024 年 3 月 20 日発行）
■目次と内容：

第 1 章 親鸞の伝記と思想

比叡山堂僧としての親鸞の新研究 －日光山大念仏会を手がかりに－

武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員・東国真宗研究所事務局長 橋本順正

これまで親鸞の比叡山時代は、比叡山常行堂で天台智顗『摩訶止観』に説かれる「90 日間念仏を称えながら阿弥陀仏の周りをまわる」といった修行を行なっていたと説明されてきた。

天台浄土教の研究を行う中でも実際には『摩訶止観』の修行が中世の比叡山で行われた形跡はなく、親鸞が実際に修していたのは浄土往生を願う『阿弥陀経』の読誦であったことが明らかになった。このような新たな修行の内実を解明する新研究として、新出史料等を検討している。

親鸞と東国 －最澄そして円仁との関係を中心に－

三重大学人文学部教授 山田雄司

本稿では、親鸞の東国滞在の意義を探求し、最澄と関係が深い道忠一門や円仁の存在について言及している。親鸞以前にも東国には多様な信仰が存在していた。当地に根付いていた仏教信仰や布教活動について考察し、親鸞の布教活動の背景を探ることが本稿の目的である。

親鸞布教拠点としての常陸国稲田

茨城県立歴史館 資料調査専門員 飛田英世

本稿では、稲田神社神宮寺にあった仏像について詳述し、親鸞がこれらの仏像に参拝していたと考察している。地元の方々との交流を通じて得た証言は貴重である。今日の関東ご旧跡巡りにおいても、稲田の重要性を象徴付ける内容となっている。

東国の親鸞と神祇信仰

筑波大学名誉教授・東国真宗研究所所長 今井雅晴

神祇（天の神と地の神、つまり神々）と親鸞の関係については、今後の真宗史の課題の一つである。特に第二次世界大戦後、浄土真宗では「神祇不拝」とされ、明治維新における神仏分離令の影響で寺院と神社の信仰が分かれた背景がある。

しかし、本稿で示されているように、親鸞一家は稲田神社の境内に居住していた。多くの門弟たちも神祇に対する信仰を持っていたことが明らかにされている。当研究は、中世の信仰生活を現代社会でどのように考えるべきかについて示唆を与えるものである。

『教行信証』と東国

武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員・国立音楽大学非常勤講師 高山秀嗣

本稿は、東国が持つ独特の土壌や環境が親鸞の『教行信証』やその布教実践を育んだと捉え、今後の「東国仏教文化」研究の先駆けとなるであろう。親鸞が『教行信証』を誰に向けて、何のために書いたのかを

解明することで、この聖典の現代的意義を見出すことができる。特に識字率が高かったとされる東国の武士が中心であれば、本稿で言及されている「東国で直面したさまざまな課題」について、今後さらに具体的な解析が期待される。

親鸞における「浄土真宗」

武蔵野大学通信教育部教授 前田壽雄

一般的に「立教開宗」と言われるが、親鸞自身には自分が「浄土真宗」という宗派や教団を創設した意識はなかった。親鸞にとっての「浄土真宗」とは何なのかについて詳述していく。「浄土真宗」という用語には、師・法然をはじめインド・中国・日本の七高僧などによって明らかにされた真実の教えという意味がある。本稿は「浄土真宗」の使用例を示し、親鸞の意を深く考察するのに資するものである。

覚信尼伝私考

真宗大谷派教学研究所研究員 御手洗隆明

親鸞の末娘・覚信尼は、稲田草庵で誕生し、1224 年の生まれである。そのため本書でも第一章に本稿を掲載した。

親鸞ほど家族に対する興味が持たれる宗祖は少なく、浄土真宗では家族という存在が重視されてきた。特に、覚信尼が「関東門弟と京都をつなぐ役割」を担っていたことが明らかになった。大谷廟堂・御影堂の建立など、親鸞から次の世代へと続く真宗史の中で注目される研究分野である。

第 2 章 浄土真宗の展開と親鸞

語られた親鸞の妻帯

二松学舎大学文学部教授 小山聡子

「親鸞は初めて妻帯した僧侶」と言われるが、正確には「初めて妻帯を公にしながら家族で布教活動を行った僧侶」と表現するのが適切だろう。本稿では、親鸞がこの妻帯をどのように「正当化」し、それが近世に至るまでどのように語られてきたかに焦点を当てている。そしてこの「正当化」が「親鸞の教えを継承する者たちにとって大きな意味を持っていた」と結論付ける。

真宗教団の草創 －興正寺および佛光寺の成立について－

真宗興正派興泉寺住職 楠正亮

真宗教団連合は十派の加盟により結成されている。本稿では、興正寺と佛光寺が覚如の時代に本願寺をしのぐ勢力であったことが紹介される。この事実からも、真宗史の奥深さが窺われる。特に、鎌倉時代に興正寺を開いた了源が鎌倉に住む武士の家人であったことが示される。興正寺および佛光寺の歴史は今後さらに注目されるべき研究課題である。

近世房総における関西移民による真宗寺院開創と門徒の動向

公益財団法人千葉県教育振興財団理事長 植野英夫

千葉県内には親鸞自身の足跡は少ないものの、地域には大きな影響力を持つ真宗寺院が多く存在する。本稿では、近世に移住して創建された寺院に焦点を当てている。これらの寺院は、漁村に位置し、関西出

身の檀家が多いという特徴がある。人々が新たな土地に移住する際にその信仰も一緒に伝わるという点を、改めて考えさせられる論考である。

二十四輩の成立事情についての考察

武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員・京都女子大学非常勤講師 南條了瑛

本稿では、親鸞の門弟を示す「二十四輩」の由来や成立時期、関連する寺院の由緒について考察している。江戸期における寺院の由緒や伝承の形成についての解明は、東国における旧跡寺院研究の課題である。本稿は、その課題への問題提起として重要なものとなっている。

本願寺覚如の活動の再検討 －本願寺中心の教団づくり？

京都女子大学発達教育学部教授 黒田義道

親鸞のひ孫である覚如は、教義の面や教団史において注目されてきたが、彼自身の人物像については十分に研究されていない。本稿では、覚如が「本願寺を中心とした教団形成を自覚的に意図していたわけではない」という見解が提示された。覚如の再評価は、現代の私たちが次の世代に何を伝えるかを考える上でも、重要なヒントを与えてくれるだろう。

顕智の聖教撰述と継承 －親鸞との関係、高田門徒のネットワークと教化を通して－

神奈川大学国際日本学部国際文化交流学科教授 ブライアン・ルパート

本稿では、浄土真宗の聖教の受容と形成に焦点を当て、高田門徒の祖師信仰と書写活動について論じている。現代のように書籍がインターネット等で簡単に手に入る時代とは異なり、聖教の書写・編集活動には弟子としての責任が伴っていた。この活動の意義についても、認識を改める必要があるだろう。さらに、本論考では門徒集団の寺院ネットワークという寺院間の横のつながりといった、これまで注目されていなかった側面を示している。

第 3 章 SHINRAN 世界への展開

中国における日本語教育と浄土真宗

筑波大学人文社会系教授 田中祐輔

筆者は近現代の日本語教育が専門である。教育の未来を考える上でその「歴史」を知ることの重要性を強調し、仏教の伝道布教においても同様に適用できるとする。本稿は、海外布教や国内での新しい伝道布教の方法を考える上で示唆に富む内容である。

米国における浄土真宗の受容と伝道上の問題

武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員・京都女子大学非常勤講師 南條了瑛

本稿では、海外伝道活動の問題点をアメリカに限らず、日本にも共通する視点から論じている。情報化社会が進む中でも、実際には海外の宗教事情をどれだけ理解できるかには限界がある。本稿では、数字で表される統計上の姿と、統計では捉えきれない実際の様子を示している。海外伝道活動の例は、日本における課題解決へのヒントになると考えられる。

エジプトの現代宗教と古代宗教および親鸞 －エジプト赴任日記から－

今井雅晴

筆者がエジプトへ赴任した際の様子を論じている。エジプトに関しては、その国の主要宗教であるイスラームについて、一般的に日本では漠然とした知識しかないだろう。イスラーム教徒の日常生活についての理解はほとんどないかと思われる。信仰と生活が深く結びついている国では、単なる理論や理屈だけでは通用しない。これらの経験談は、日本人の信仰と生活について考えるきっかけを与えるものである。

以上